



第1回 | 連載を始めるにあたって

著者

Profile

さんどう まさる
山藤 賢

東京都生まれ。昭和大学医学部、同大学院医学研究科外科系整形外科学修了。医学博士。医療、経営、教育の、幅広いフィールドで活躍中。

【医療者として】学生時代、名門校サッカー部に在籍し、全国大会出場経験もあることから、ピッチに立つ選手に寄り添う医師になりたいと願い医学部に進学。さまざまなご縁からJリーグ、サッカー日本代表各世代のチームドクターを歴任。サッカー日本女子代表なでしこジャパンではオリンピック、ワールドカップなどをともに戦い抜いた。現在は東京都サッカー協会医学委員長を務め、2020東京オリンピック・パラリンピックに向けたメディカルマネジメントにかかわっている。

【経営者、教育者として】医療法人社団昭和育英会理事長として医療機関を複数経営。臨床検査技師教育に特化した昭和医療技術専門学校では学校長として学生に向き合う。日本臨床検査学教育協議会理事、短期大学専門学校部会会長。著書『社会人になるということ』（幻冬舎）が、丸善日本橋店にてビジネス部門週間ランキング1位となるなど、教育・人材育成に関する執筆、講演活動でも注目されている。

【個人として】趣味の歌舞伎鑑賞では、同級生の歌舞伎役者10代目松本幸四郎の後援会会長も務める。他、旅と読書と馬が大好き。

企画趣旨（編集部より）

編集部には、読者の皆様からさまざまな質問や悩みが寄せられています。検査の専門知識・技術などについては誌面でお答えしてきましたが、それ以外のたとえばコミュニケーションに関するお悩みなどについては、これまであまり取り上げる機会がありませんでした。そこでこのたび、学生さんの進路・勉学に対する悩みや、若手技師の方の働き方・将来に関する悩みなどに対して、お答えする連載を企画しました。多様なお立場での豊富なご経験をおもちでいらっしゃる山藤先生にお考えを執筆していただくことで、これからの臨床検査を担う学生や若手の皆様の活力となるような連載にしたいと考えております。

※本連載で取り上げてほしいお悩みや、ご質問・感想は巻末のホットラインカード、または編集部直通のE-mailアドレス (mt@ishiyaku.co.jp) までお寄せください。

ご挨拶

はじめまして、山藤です。今回、医歯薬出版『Medical Technology』編集室の方から、「医療現場で働く人達や学生達の悩みに答えるような連載をしてほしい」と頼まれました。リーダーといわれるような立場の方々から、中堅、新人、学生まで、いろいろな立場の方が読まれる雑誌ですので、幅広い方々が対象なのですが、とりわけ若い人向けのメッセージを中心に添えてほしいとリクエストをいただいています。とても難しいチャレンジではありますが、今の私ができることとして、これからの医療の現場、またそこにかかわる人々がより豊かで幸せになれるよう、もっている知識と知恵で精いっぱい頑張らせていただきたいと思います。

この連載は私が一人で作っていくものではありません。皆さんから質問も受け、そして、ともに感じ、ともに考え、対話していくようなイメージでしてほしいと考えています。私自身の力不足から、至らない内容、表現も多々あるとは思いますが、ぜひ、皆

さんとともに、この時間を共有していけたら幸いと思っています。そしてこの時間が、皆さんが少しでも前向きに、人生を肯定的に歩んでいける一つの気づきになれば幸いです。

連載への想い

まずは、自己紹介も兼ねて、私がこのような場で語らせていただく際に、その拠り所となる3つの立場を簡単にご説明させていただきます。私は、臨床検査技師教育に特化した昭和医療技術専門学校の学校長ですが、同時に複数の医療機関を抱えた医療法人の理事長として、また臨床の現場においては現役の医師として活動しています。つまり、医療従事者を送り出す教育者としての立場、雇用する側の立場、一緒に現場で働く仲間としての立場、の3つの立場があります。このことが、学校長としてどのような臨床検査技師を育てるかを考える原点となっています。

また私の人生経験のなかで、何かの目標を立ててそれに向かって夢をかなえるのがすべてという生き方はしてきませんでした。夢や目標、目的もとても大事ですが、それよりも『イマ』の目の前のことを一生懸命に生きるということを大切にしてきました。たとえば、なでしこジャパンのチームドクターも、今の医療経営も、学校長も、今度のオリンピックのドクターも、自分がやりたいと言って手をあげたものは一つもありません。人から頼まれて結果的にやっていることばかりです。その時は意味はわからずとも自分自身がその時その時に強くがむしゃらに打ってきた点が、後から色々縁やつながりをもって、結果的に自分の人生は幸せになっていると感じています。そのような経験も、連載タイトルにあるように人生を肯定的に生きるという生き方につながっており、連載のなかでも紹介していけたらと思います。

そして学生教育において、また人材育成において、私が一番大切に思っていることがあります。それは一人一人が「自分の頭で考える」ということで

す。私達の生き方には正解はありません。誰かが教えてくれた答えが人生の正解になるわけではありません。普段私達は形のあるもの、目に見えるものには正解を求めます。しかし、大事なものは、そこではなく、自分自身がどうあるか、どう生きるかにあるのではないのでしょうか。たとえば、今後、AIの発達で医療の現場にも影響を及ぼしてきます。しかし、私達人間にしかできないことはなんでしょう？ 医療人としてはどうでしょう？ 私は、以前より「人の心に寄り添うこと」は、私達人間だからこそできること、いや、医療人として、しなければならないことではないかと思っています。しかし、「人の心に寄り添うこと」は、目に見えるでしょうか？ 心は目に見えるでしょうか？ 見えないけれど、私達はそれを信じています。医療人は、この感覚を研ぎ澄ますこと、そして自分の頭で考えることが大事なのではないかと思っています。

本連載が目指すもの

この連載は、そのお手伝いかと思っています。自分自身に向き合うお手伝い、そして気づきのお手伝いです。大事なものは、まずは「問い」です。周囲に対する「問い」、自分自身に対する「問い」です。そして、執着や思い込みから外れて、何かに「気づく」こと、それを「感じる」こと、その感じたことを「自分の頭で考える」ことです。起きた出来事、今の環境は変わらなくとも、私達は自分自身の人生を決して否定的ではなく、肯定的に生きることができはずです。もちろん、私自身、何も完成された人間ではありませんし、今も日々悩んでいますし、成長したいと思っています。これからの世の中を、より良くしていくために、そのために私も含めた皆さん、「自分自身が」より良くなるために、この連載を通して、皆さんとともに歩いていけたらと思っています。まずは「問い」から始めましょう。お待ちしております。どうぞよろしくお願いいたします。